2012 年 2 月 15 日放送

「麻疹排除」

国立感染症研究所感染症情報センター　室長
多屋　馨子

2012 年麻疹排除に向けた取り組みと進捗状況についてお話したいと思います。

麻疹の概要

麻疹は、感染力が非常に強く、人から人へ空気感染、飛沫感染、接触感染などでうつっていく病気です。罹患すると合併症を起こすことも多く、栄養状態がよくなかったり、免疫抑制状態では、特に重症化のリスクが高いと言われています。

発症すると、麻疹ウイルスに特異的な特効薬はありませんので、有効な予防手段としてワクチンを受けておく以外に方法がありません。現在は、麻疹風疹混合ワクチンの２回接種によって、麻疹にかからずに済むことが期待できます。

麻疹の合併症

まず、麻疹の合併症にはどのようなものがあるかをお話してみたいと思います。

麻疹にかかると、およそ 30%の人が合併症を併発します。最も多いのは肺炎です。次いで、中耳炎や脳炎などがあります。クループ症候群や心筋炎などもあります。

肺炎と脳炎は麻疹の二大死因と言われていますが、脳炎は、麻疹を発症した 1000 人に 0.5 人から１人ぐらいの割合で見られると言われています。

国の麻疹対策の取り組み

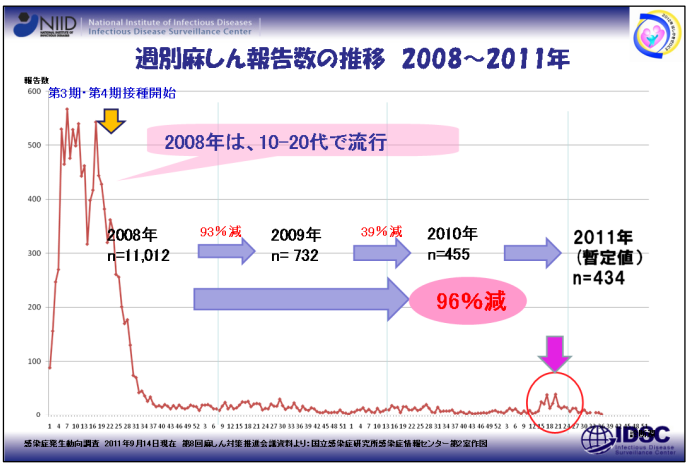
我が国は 2007 年に大きな流行を経験し、2008 年から国を挙げた麻疹対策を行っています。啓発ポスターとして、「現代（いま）なら守れる」「２回の予防接種ではしかは無くせる」というキャッチフレーズをもとに、2011 年度は麻疹ワクチンの啓発をしています。

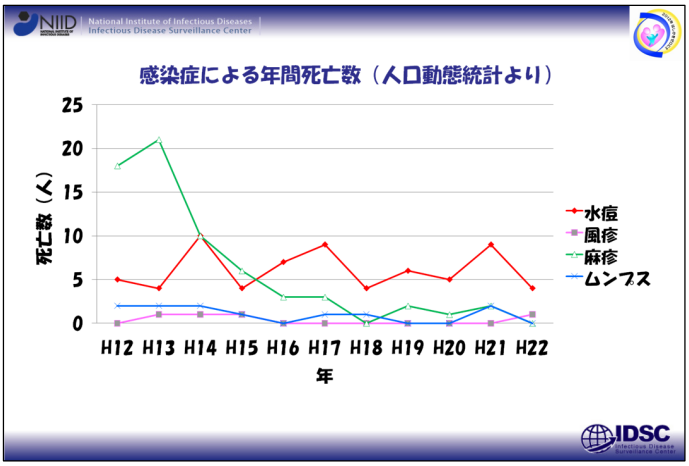
麻疹患者数の推移

2007 年、2008 年は、10 代から 20 代で大きな麻疹の流行がありました。2008 年は１年間に１万 1012 人の患者さんが発生いたしましたが、2009 年は対策の効果もあって、732 人に、2010 年は 455 人と、96%の減となっています。

2011 年は、暫定値ですが、１年間で 434 人の報告がありました。2011 年春、海外で麻疹ウイルスに感染した方が帰国されてから発症する、いわゆる輸入例が何人か続きました。そこから周りの方に広がった場合もあるわけですけれども、これまでとは違って、多くの関係者の方々の対策の効果もあって、大流行に至らずに済みました。

現在、麻疹による年間死亡数は徐々に減少しており、毎年あっても数名に限られていますが、発症すれば死亡するリスクもある、重症の感染症であるということを忘れてはいけないと思います。



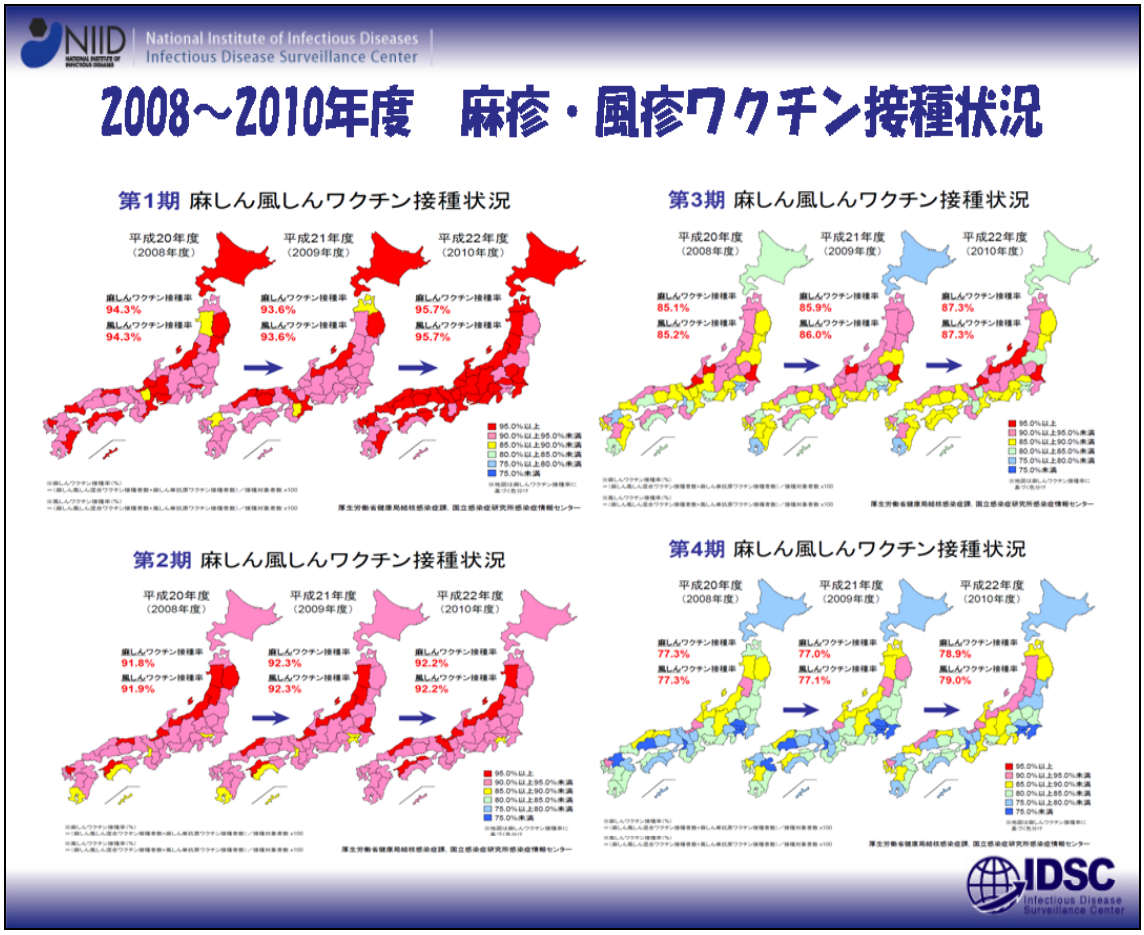


麻疹風疹ワクチン接種の現状

麻疹を予防するためには、麻疹風疹ワクチンの２回接種が今求められています。接種率は徐々に高くなってきていますが、１歳の接種率は 2010 年度 95.7%で、目標の 95%以上を初めて達成しました。

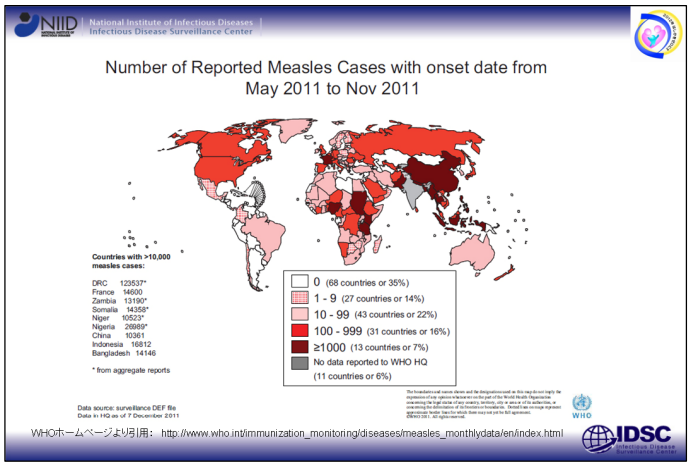
小学校入学前の１年間に２回目の麻疹風疹混合ワクチンの接種が勧められていますが、2010 年度の接種率は 92.2%で、あともう一息というところです。2008 年度から５年間に限って、中学１年生と高校３年生相当年齢の方に２回目の麻疹風疹混合ワクチンが定期の予防接種として実施されていますが、残念ながら第３期中学１年生の 2010 年度の接種率は 87.3%にとどまってしまいました。第４期高校３年生相当年齢の方は、78.9%と５人に１人は受けずに対象の１年間を終わってしまっています。

麻疹は、１回のみの予防接種では発症を予防できない場合があります。もちろんワクチンを１回も受けていなければ、非常に重症な麻疹にかかる可能性が高いわけですから、まずは予防に努めることが重要です。



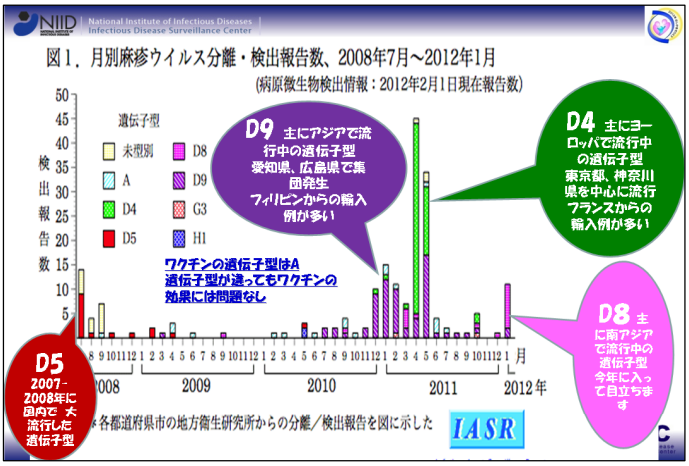
海外からの麻疹輸入例の増加

今、世界では、麻疹が各地で流行しています。従来アフリカとアジアの国々に多かったと言われていましたが、昨年はヨーロッパで大流行しました。また、米国など、麻疹を排除したという宣言もした国でも、麻疹の輸入例が過去15 年間で最も多いという状況になっています。



最近いろいろな手技、検査方法が発展して、麻疹ウイルスのさらに詳しい遺伝子型もわかるようになってきました。ヨーロッパでは主にＤ４という遺伝子型、アジアでは主にＤ９という遺伝子型、同じくアジアの南アジアではＤ８、そしてアフリカではＢ３という遺伝子型の麻疹ウイルスが主に流行しています。

以前日本は、麻疹輸出国と言われた時代が長くありました。しかし、昨年から日本は、麻疹輸入国へと移り変わったのです。海外に行かれて、海外で感染した方が、日本に帰ってこられてから麻疹を発症するという輸入例が昨年相次いで報告されました。ヨーロッパの国々で感染した方は、Ｄ４という遺伝子型の麻疹ウイルスが検出され、アジアの国々で感染した方は主にＤ９、あるいはＤ８といった遺伝子型の麻疹ウイルスが検出されています。一部Ｇ３という遺伝子型の麻疹ウイルスが検出された方もいらっしゃいます。



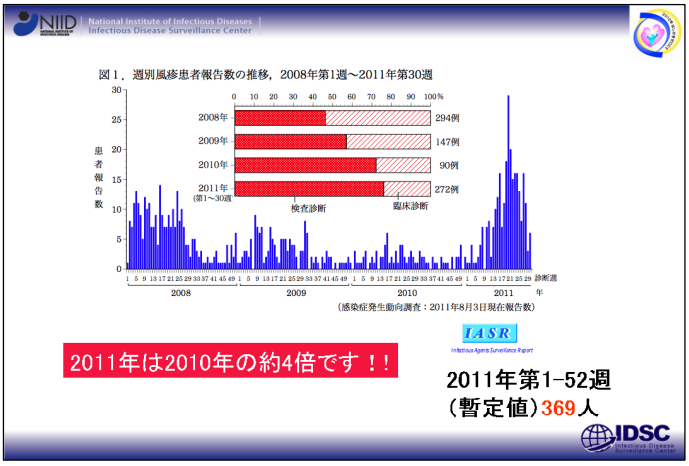
そして、今年、Ｄ８という遺伝子型の麻疹ウイルスが国内で散発的に発生が続いています。海外で感染して、国内で発症された方はもとより、渡航歴がない方も発症しているという情報が寄せられています。

空港に勤務された方の発症例や、またその家族の発症例、学校や保育園などでの発症例も報告されていますので、もし、麻疹含有ワクチンを接種されていない方は、急いで受けておくことが重要かと思います。

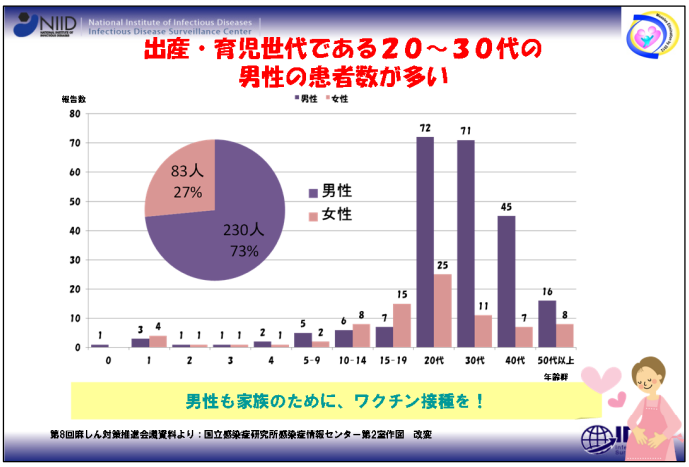
もう一つ、海外に渡航される前には、麻疹にかかったことがない、麻疹ワクチンを受けていない、あるいは１回のみの方は、麻疹風疹混合ワクチンを受けてから渡航されることをお勧めしたいと思います。

風疹の流行の状況

その理由としてもう一つ、昨年から風疹が７年ぶりに流行をしているという情報があります。風疹は妊娠初期にかかると先天性風疹症候群の赤ちゃんが生まれる可能性があり、特に妊婦さんはかかりたくないとして、予防が必要な感染症の代表的なものになっています。



2004 年に 10 人の先天性風疹症候群の赤ちゃんが生まれて、風疹ワクチンの接種の強化が行われました。2011 年は 2010 年の４倍もの報告が上がっていますが、特に福岡県、大阪府、東京都、神奈川県からの報告が多くなっています。



また、昨年の流行の特徴としては、成人が中心の流行であるというところです。特に、成人男性に多く発生しています。20 代、30 代、40 代の男性が最も多く、男性と女性の割合は３対１と、男性が多くなっています。

なぜ、このようなことが起こっているのでしょうか。それは、1977 年から 1994 年までの間、日本では女子中学生にのみ風疹ワクチンが定期の予防接種として実施されていたためです。当時中学生だった男性は、風疹のワクチンを受けていません。また、クラスの半分の女性が風疹ワクチンを受けていることで、流行する頻度も少なく、風疹ウイルスに曝露する機会も少なかったのでしょう。かからずに大人になっている方も多くいらっしゃいます。30 代前半は、30%の方が風疹の免疫を持っていません。40 代の方も、５人に１人は風疹の免疫を持っていません。これらの年齢の方々は、ちょうど出産・育児世代であると言えるでしょう。女性のみならず、男性も風疹のワクチンを受けて、かからずにいてほしいと思います。

昨年、このようなこともありました。ある職場で風疹が集団発生したという報告があったのです。海外では、風疹ワクチンが定期接種に入っていないために、風疹の流行規模は日本よりも大きくなっているところがあります。特にアジアの国々には、出張等で渡航される方が多くいらっしゃると思いますが、そこで感染して、国内に帰ってきて発症し、そして職場内の男性に感染を拡大させてしまったという事例が相次いで報告されました。発症された方は、皆さんが男性、そして 20 代から 60 代までの男性が報告されました。

これらの方々は、家族に妊娠されている人がいるというのみならず、職場にも妊娠されている女性がいらっしゃるでしょう。また、ご自身もかかることで、血小板減少性紫斑病や脳炎といった合併症があるということも忘れてはならないと思います。

麻疹・風疹排除のために

最後に、2012 年は国内から麻疹を排除、ゼロにするということを目標にした年です。この目標に向かって、麻疹対策に努力をしてきたわけですが、ことしはぜひ、麻疹と風疹の両方を日本からなくすことを目標にして、２回の予防接種を受けてほしいと思います。